

学校の図書館にある楽しみ

自由な場所『図書館』にある遊びと余裕



Q.「図書館」ってどんなところ？

○子どもたちの回答

- 本を読むところ
- 勉強するところ
- 静かにするところ
- 楽しいところ
- 授業で来るところ
- なんとなく来てもいいところ

ざっくりとしたイメージの中に、「**何かができる**」だけではなく「**こうしなければならぬ**」の制約を感じる回答や表情が多くみられた。



実際はどんな場所か

●ルールに守られた自由な場所

図書館はいくつかのルールや優先されることなどの約束はあるが、何かを「しなければならない」場所ではない。本がある場所であり、情報拠点であることは確かだが、行動や活動内容が読書や勉強のみに限定される必要はない。

⇒学習の補助だけでなく、「楽しい！」を核にした児童生徒主導の主体的な活動拠点としての図書館

大野川小中学校図書館の大事にしているルール

- ・誰かが悲しい気持ちになることはしない（思いやりの心をもって考える）

自分が楽しいと思っていることでも、他の人は悲しい気持ちになったり迷惑に思っていることがあるかもしれない。本を読んだり勉強をする以外のこと（基本的なルールの外の活動）をするときは、必ず他の図書館を利用している人にも相談や確認をする。

例）「端のテーブルでかるたをやりたいんだけど、少し大きな声を出しても大丈夫？」

⇒相談していいと決まればしてもよい。それでは困る、それはちょっと嫌だと思う人がいればやめるか、どうしたらいいか考えたり、さらに相談する。

子ども同士の相談例

小学校低学年の児童と高学年の児童の間での相談。

二時間目休みに、図書館に置いてあるかるたで遊びたいと低学年児童数人から司書に申し出があった。その時の利用者は高学年児童が一名で読書中。低学年児童は声が大きくなってしまうことが心配なようだったので、相談してみたら？と促した。

「この机（小学校棟側端の机）でかるたやってもいい？」と低学年児童が高学年児童に尋ねると「いいよ！でもあんまり大きい声だとびっくりするから、叫んだりはしないでほしいかな」と返事があった。

その後高学年児童は中学校棟側の少し離れた席に移動して読書、低学年児童は小さめの声でかるた遊びを楽しんだ。

休み時間が終わりに差し掛かり、高学年児童に声をかけたが「離れてたし全然気にならなかったよ。相談しに来た二年生かわいかった」と言っていた。

低学年児童にも声をかけたところ「ないしょ話してるみたいなかるたになっておもしろかった！」と言っていた。基本的には静かに過ごす、読書など集中したい人を優先するルールのある図書館でのかるた遊び（声を出す遊び）は普段のそれとはまた違った楽しみがあったのかもしれない。



大野川小中学校図書館の目指す形

- アイディアや思考のタネが詰まった空間
- 話し合い、分かりあうための議論がしやすい場所
⇒幼・保で培われた「生きる力」の延長・発展。人間関係の基礎であるコミュニケーションに慣れてほしいという願い。
- 定められたルールをベースにしながら、自分たちの発想によってより良い環境や状態を考えて作り出せる基地
⇒守るべきルールとある程度柔軟に考えてよいものを自分たちで考えるきっかけとしての場の提供。

つまり……

大野川小中学校図書館の目指す形

フリーダム（何をやってもいい自由）ではなくリベラル（自分たちで考え、創り上げた自由）な楽しい場所！

子どもたちが熱心に取り組んでいる活動

- ビブリオバトル

中学校の冬の読書旬間で例年開催。卒業生たちが意欲的に取り組んでいた姿を見ていたことに加え、毎年好きな本への愛情を迸らせている生徒がいるため、つられるように他の生徒も数週間前から本を選んだり話の構成を考えたりする姿が見られる。

中には中学校入学時から「1年ではこの本、2年ではこれ、3年になったらこの本（一番気に入っているという本）を紹介したい！」と最終学年までのプランを立てている生徒もいる。







子どもたちが熱心に取り組んでいる活動

- **館内装飾作り**

主に窓飾りを司書が季節や子どもたちの興味関心に合わせたものを作る際、「私も作りたい!」との声があったので一緒に作っている。

中でも例年継続して行っているシャツ作りは好評。(別紙参照)

- **図書館ポスト**

日々感じたことや誰かに伝えたいと思ったこと、悩みなど本に関しても関係していなくてもどんな内容でも書いて投函していいポスト。記名のある手紙には司書が必ず返信をする。

小学生ではお手紙遊び、中学生では悩み相談などが多く届く。



子どもたちが熱心に取り組んでいる活動

- おはなしの箱

お題が書かれたくじを3枚程度生徒が引き、そのお題で司書が即興三題噺を語る遊び。生徒はあくまでおはなしを「買う」のであり、お代は感想を言うことで支払うルールになっている。

休み時間に来館した生徒から希望があったときや、図書館の授業の最後のおはなしの時間に行うことが多い。人気のある取り組みで、毎月必ずおはなしを買いに来る子がいる。

始めてから1年程度経つが、最近は「私もおはなしやさんしてみたい！」という声が生徒から上がっているので貸し出しも検討している。



子どもたちにも人気な図書館に関する本

- 『図書館のトリセツ』 福本友美子／著 江口絵理／絵 講談社

図書館はなにかを強制する場所ではないとわかりやすく教えてくれる一冊。

図書館の基本ルールから応用・発展的な使い方まで書かれており、本はそんなに好きじゃないけど本を読む人になってみたいとは思っているような人にもやさしい。

- 『100万回死んだねこ 覚え違いタイトル集』 福井県立図書館／編・著 講談社

子どもたちからすればあまり耳なじみのない「レファレンス」における愉快的事例がまとめられた楽しい一冊。

本あてゲームをする子もいれば、協同レファレンスデータベースに興味を持つ子も出てきた。